

電子版

No.33

2024/8/9

教文通信

発行所 | 長野県教育文化会議

発行人 寺尾真純

教育のつどい 2024 レポート

第2分科会 外国語活動・外国語教育

対話を促す授業づくり

上小支部

丸子修学館高校

盛田彩花

1 「学校」という場を、最大限に生かしたい

教壇の上に立ち、授業をしていると、ふと考えることがあります。「生徒はせっかく学校に集まって来ているのに、私がしゃべっているだけの授業でいいのか」ということです。現代は様々な教育ツールであふれています。学習ノウハウ本はもちろん、スマホアプリ、教育系の SNS など、勉強はする気さえあれば、家で自分一人でもできてしまいます。通信制の学校や、リモート授業など、集散しない形の学習もあります。わざわざ「学校」という場所に集まって勉強する意味とは何か、考えることが多くなりました。

学校というシステムには、生徒同士が対話によってお互いから学び合い、人間関係を広げていけることに最大の利点があると思います。特に英語という教科は、やりとりが前提となっている言語の学問です。「英語コミュニケーション」という科目名にあるように、本来英語の授業というのは、教師による説明よりも、生徒同士が英語を使った対話を通して、英語運用能力が伸びていくことが理想だと思います。もちろん、学校というシステムがすべての子供たちに適しているとは限りません。しかし、多くの子供たちが学校という形を選び、また社会から「学校での学び」が求められている以上、教員として、「生徒同士が対話する場がある」という利点を最大に活用しなければいけないと感じています。

しかし、授業はそううまくいきません。いざ授業で「今日はこのテーマについて（英語で）話してみよう。」と投げかけただけで、活発に対話ができるクラスは珍しいと思います。少なくとも、現在私が勤める学校の授業では、クラスが「しん…」となるか、仲のいい友達同士の雑談時間になってしまうことがほとんどです。どのような指示を出せば、対話による学習が活発になるのか、日々頭を悩ましているのが現状です。

このレポートは、対話を妨げる要因を二つ挙げたうえで、各要因に対して具体的にどのようなアプローチをしてきたのかをまとめたものです。まだまだ課題は山積していますが、ここでまとめ実践例を修正しながら、これからも対話を促す授業作りに励んでいきたいと思っています。

2 何が対話を妨げるのか

2-1 能力的要因

対話を妨げる要因は大きくわけて二つあると考えています。一つ目は能力的要因です。英語教科に関していえば、語彙力・文法力・リスニング力など、総合的な英語運用能力の低さが、対話を妨げる原因になります。英語の授業では当然、英語を使用した対話を中心となるべきですが、知っている単語や文法の知識が少なければ、意見を述べることもできません。加えて英語運用能力の低さが、対話することへのモチベーションを大幅に減少させてしまいます。

また、教科に関わらず、「自分の意見を持つ力」の低さも対話を妨げる原因だと考えます。「自分がどう思うのか」という問いに対して、一般論を述べるにとどまったり、考えることを投げ出してしまったりする生徒が多く見受けられます。自分の意見に芯がないため対話が続かない、そもそも考えたこともないので言うことがない、という状態になってしまう場面を何度も見てきました。

2-2 人間関係的要因

二つ目の要因は人間関係的要因です。実は、対話を妨げる最大の要因は、個々の能力的な低さよりも、生徒同士の不信感にあるように感じます。ペアワークやグループワークを設けても、ある特定の人物とは話ができない、また周りに仲のいいメンバーがいないと何も話ができない、という現象はどの教科でも起きている事実です。思春期の子供たちが、不特定多数の同級生と対話することが困難であることは理解できます。しかし、授業という「建前」があるからこそ、話すきっかけができたり、そこから人間関係の広がりを見つれたりすることができるのもまた事実です。教師の一つの役割は、授業という「建前」をうまく利用し、生徒同士が安心して対話できるような環境づくりをすることにあると思います。

3 実践報告

3-1 能力的要因に対するアプローチ

3-1-1 「選んで、台本を作って話す」

新課程となり、教科書の随所に対話を前提としたアクティビティが豊富に記載されています。しかし、英語の運用能力に差のある生徒同士ではなかなか対話がしづらいというのが現状です。そこで、対話の場面ではあらかじめ予想される答えをいくつか用意しておき、そこから選んで答えるという形を多く実践してみました。【例1】は本校の一学年で使用している ALL ABOARD! 1 English Communication1（東京書籍）の「Lesson 3 A Train Driver in Sanriku」の題で電車がテーマになっているレッスンです。導入部分の活動「Talk! : 次の質問に英語で答えましょう How often do you take a train?」を行った際の過程になります。

【例1】

時間	生徒の活動	教師の動き
1分	①教師の後に続き「How often do you	①「How often do you take a train?」と板書

	take a train?」と発音する。 ②質問の意味を確認し、自分の答えを頭 の中でイメージする。	し、音読する。 ②質問の意味を確認する。 ・how often~?「どれくらい（の頻度で）～？」 ・take (乗り物)「（乗り物）に乗る」
2分	③提示された例を参考に、自分の答えを教 科書に書く。 ④必要な場合は、音声発音ソフト等を使 用して発音を確認する。	③電子黒板に答えの例（ロイロノートで制作） を示す。（資料2参照） ④机間巡視し、質問があれば答える。
2分	⑤ペアになり、じゃんけんで勝ったほうから英 語の質問をする。	⑤ペアワークを始めるように指示をだす。 Make pairs. Please do じゃんけん and the winner starts to ask the question.

(資料1：活動中に映した画面（ロイロノートのカード）)

回数	+	期間
once 1回		
twice 2回	+	a week / month / year
… times …回		週に 月に 年に
【例：three times a week 「週に3回」】		

この活動のポイントは、解答を「選んで書く」という点です。回数 (onece,twice,・・・times) + 頻度 (a week/ a month / a year) から自分の答えに最も近いものを選ぶだけであるため、ほぼ全員が解答を作ることができました。解答例を電子黒板に映すのは、板書する時間を短縮し、スムーズに自分の答えを英語にするためです。また、自分の答えを教科書 (タブレット) に書き込むことで「台本」を作成します。手元に読むべき台本があると、その後の対話活動で、しっかり読む生徒が増えた印象がありました。本来ネイティブが行う対話活動とは異なりますが、準備した「答えの台本」を自分の口で発音することで、頭の中に「自分だけの例文」を増やしていくことがねらいです。

【例2：文化祭明けの授業での Small Talk：How was the school festival?】

I enjoyed ….	「…を楽しんだ。」
I was tired from ….	「…で疲れた。」
I wanted to ….	「…したかった。」
… performance	「…の発表」 / … display 「…の展示」
fireworks	「花火」 / eating … 「…を食べること」
preparing …	「…を準備すること」 /
my work	「(当番などの)仕事」 / watch … 「…を観る」

例2は文化祭明けの授業の冒頭で「How was the school festival?」の題で Small Talk を実施した際に使用したロイロノートのカードです。進行方法は例1と同様ですが、教科書の内容ではなく、生徒の学校生活に関連した題になっていることが特徴です。教科書の内容から離れ、このように身近な話題になるほど、「～って英語でなんて言うんですか?」と質問をする生徒も増えた印象がありました。また例1の題と比べると、解答方法に幅がある質問になっています。このような質問の場合は、センテンスの例+単語の例を用意するようにしました。

3-1-2 音声読み上げソフトの活用

例文やタブレットの翻訳機能等を使用することで、ほとんどの生徒が文章 (台本) を作ることができですが、最大の難点はそれを読むことです。そこで、インターネット上で無料使用できる音声読み上げソフトの使用を推奨し始めました。「音声読み上げソフト：音読さん」 (<https://ondoku3.com/ja/>) は、入力した任意の英語を音声として生成し、再生できるものです。生成した英語はダウンロードして保存することも可能になっています。英語はアメリカ英語・イギリス英語・オーストラリア英語・インド英語に対応しています。

このソフトの最大の利点は、任意に入力した文章をかなり自然な形で読み上げてくれるという点です。実際、教科書の本文を入力して聞いてみても、教科書付属の CD とほぼ変わらない発音・流暢さ・アクセントになっており、生徒が見本として聞くために非常に適しているという印象です。授業内で読めない単語・文章がある場合は、タブレットから音を出してよいという指示を出し、使用を推奨しています。まだ使用している生徒があまり多くはありませんが、使用した生徒からは「自分の作った文のお手本が聞

(資料3：今年度のランダム座席表)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	名前	ランダム	ここを押すと変わる							
2	c	0.64118	黒板							
3	i	0.9718								
4	b	0.33128	c	f	O	R	h	d		
5	F	0.56225	i	K	g	k	Y	P		
6	M	0.72675	b	D	A	B	T	J		
7	V	0.59956	F	e	G	S	Q	I		
8	f	0.51198	M	N	Z	W	H	a		
9	K	0.45713	V	C	F	L	X			
10	D	0.15979								
11	e	0.17409								

教室の机配置を前提に全員が席替えをする。

ペアワークは同一色の隣同士で行う。色のついたセルは移動ができる。

3-2-2 好きなメンバーと取り組む⇒発表相手はランダムで

上記の例1や例2のように5分程度の簡単なやり取りをする際は、座席をかえずに、席の隣同士のペアで取り組むようにしています。いつも決まったペアと行うほうが「習慣化」しやすく、スムーズに進むと考えたためです。例3は、レッスンのまとめに用意されている比較的長い文章のやり取りを必要とする活動です。例1・2とは異なり、最初の「台本作り」の活動を好きなメンバーと取組んでよいと指示を出した際の活動経過です。

【例3：Lesson4 Activity】

①リスニングの SCRIPT：下線部の部分を聞き取り、空欄を埋める。

Jun:Where do you want to go next summer?

Sam:I want to go to Okinawa.

Jun:Why do you want to go there?

Sam:Because I like beaches and the sea.

Jun:What do you want to do there?

Sam:I want to swim in the beautiful ocean.

時間	生徒の活動	教師の動き
3分	① C Dの音声を聞き、空欄を埋める。Junの三つの質問を教師の後に続いて発音する。	① C Dを流す。答えを板書する。Junの三つの質問を、発音する。

7分	<p>②完成したスクリプトを参考に、「行ってみたい場所」について書く。</p> <p>③必要な場合は、音声発音ソフト等を使用して発音を確認する。</p>	<p>②「行ってみたい場所」について書くように指示を出す。席の移動は自由とし、話し合いながら答えを書くように伝える。</p> <p>④机間巡視し、質問があれば答える。</p>
5分	<p>⑤席を移動し、隣の席の生徒とペアを作る。</p> <p>⑥三つの質問を発音する。</p> <p>⑦じゃんけんで勝ったほうが最初に質問者を務める。質問者は、相手の答えを聞き取って教科書に書き込む。</p>	<p>⑤電子黒板にランダム座席表を映し、席を移動するように指示を出す。</p> <p>⑥もう一度三つの質問の発音を確認する。</p> <p>⑦ペアワークを始めるように指示を出す。</p>

この活動の特徴は、比較的長いやり取りをするという点です。質問項目が三つ「Where do you want to go next summer?」「Why do you want to go there?」「What do you want to do there?」あり、それぞれに対する答えを三つ用意する必要があります。

「②行ってみたい場所について書く」の時点では、生徒が席を自由に移動し、好きな相手（もしくは一人）と相談しながら答えを作るように指示を出します。自分の好きな相手と相談しあいながら作ることで、比較的長く複雑な文章であっても教えあいながら完成させることがねらいです。しかし、発表する相手も好きなもの同士にしてしまうと張り合いがなくなってしまうため、発表の相手は教師側がランダムに指定します。そうすることでいつも決まった人物とだけでなく、違う相手と話し合う機会を設けるようにしています。

4 課題と展望

4-1 能力要因に対するアプローチに関して

今年度取り組んできた「例文から選んで、台本を作ってから話す」というやり方は、本来のコミュニケーションの形とは異なります。実施の対話のように、聞いたことをその場で判断し、話すという能力を上げることには適していません。しかし、同じ台本を何度も読むとその内容がすぐ頭から出てくるようになるように、繰り返し行うことで実際の対話場面でも使用することができるようになることが期待できると考えています。現在の課題は、その「繰り返し」をどのように盛り込んでいくかということにあります。教科書の内容はレッスンごとに異なるのはもちろん、Small Talk も毎回話題を変えるため、同じような回答になることは少ないのが現状です。教師が1年を通して使ってきた表現をきちんと把握し、できるだけ同じ言い回しを使用したり、同じ単語・熟語を使うように意識したりする必要があります。この

活動を1年続け、経過を分析したいと思います。

4-2 人間関係的要因に対するアプローチに関して

教師として、生徒にはできるだけ違うメンバーで話し合いなどをし、人間関係の輪を広げてほしいという気持ちがある一方で、実際は非常に困難です。生徒間の関係をすべて把握できるわけでもなく、教師が何も言うべきではない状況もあり得ます。実際、昨年度は、グループワークを頻繁に行ってききましたが、ある生徒からは「グループワークをやるから英語に行きたくない」と言われたこともありました。しかし、あらゆる人物と対話する力は生徒にとって非常に重要です。その力をつけるためにも、授業内の対話活動は減らすべきではないと思います。

私は年度初めのオリエンテーションで「話し合いの場で、意見を馬鹿にする言動を絶対にしない」「誰かの発表の後には必ず拍手をする」「困ったことがあったら相談する」ことを約束し、対話の場面ではこれをよびかけることを意識しています。しかし、それ以外でどのような声掛けをすることが、生徒同士の対話の促進につながるのかは、よくわかりません。これからも様々な方法を試したり、他の先生方と相談しあったりしながら、考えていく必要があると思います。

5 おわりに

インターネットや人工知能の進歩により、対面でのコミュニケーションがどんどん減ってきています。その中で学校というシステムは、生徒同士が対話によって学ぶことができるという点で、非常に重要な場所であると同時に、多くの期待が寄せられている場所であると思います。能力差やモチベーションの低さなどから、対話による学習には様々な困難があることは事実です。しかし、その困難から逃げるのではなく、工夫や趣向をこらし、生徒同士が円滑に対話のできる授業を模索していくことが、教師の使命の一つだと思います。今後も様々な意見を取り込みながら、試行錯誤を重ねていきたいです。